



ユニセフ国井医師リポート

12

スイス・世界基金へ転身

ユニセフを辞職し、3月1日からスイス・ジュネーブに事務局のある世界エイズ・結核・マラリア対策基金(世界基金)に移った。知人たちは「華麗なる転身」「ご栄転」ともてはやす。が、パンツひとつで過ごせる、大自然豊かな熱帯地域が好きな自分にとって、寒くて曇りがちで物価の高いジュネーブは住みにくい。何より現場が好きなのには、そこから離れることへの抵抗感もある。それでも転身には理由がある。

今から10年以上前、アフリカに行くと、驚くほど多くの人々がエイズで



國井修さん

死亡していた。ある国では3人に1人がエイズウイルス(HIV)に感染。働き盛りの若者も次々に死亡し、そのため農業生産が低下し、孤児が急増した。エイズになった患者を診断・治療する医師や看護師も病に倒れる始末。このひとつの病気により、平均余命が20歳も下がった国もある。エイズで国が滅亡するのではないか、との危惧も冗談には聞こえなかった。



「ソマリアを離れても、ソマリアの人々のことは忘れない」
=2010年8月、ソマリア北東部のガロウェ(國井修さん撮影)

このエイズの流行で結核への感染の勢いも強くなった。地球温暖化、人口の移動などで、マラリアも世界に拡がり、多くの子どもを奪っていった。このような感染症は地球規模で拡がり、今、この核への感染の勢いも強くなっている。地球温暖化、人口の移動などで、マラリアも世界に拡がり、多くの子どもを奪っていった。

ここで2000年のG8九州沖縄サミットを迎

える。世界で感染症の蔓延をどうにか食い止めよう、そのためには大規模な資金を調達し、援助国、被援助国、企業や民間財団、NGO、感染症に苦しむ人々のグループ、学界、国際機関などが一致団結して感染症と闘おう、と日本が議長国として呼びかけた。

この戦略部分を私は担当することになる。これを改善することで、母子保健や保健システム全体の強化にもつなげ、アフリカを含め世界中でより多くの人々を救うことができるかも知れない。

これが発端となって設立されたのが世界基金である。2002年に創設された、10年間で2兆円以上の資金を世界から集め、世界151カ国で300万人以上のエイズ患者の治療、900万人以上の結核患者の治療、2億張以上のマラリア予防の蚊帳などが行き渡った。私もアフリカの現場において、これらの感染症による死亡者や感染者が減少していくのを肌で感じた。やればこんなことができるんだ。国際支援を続けていくことへの自信と希望が湧いた。

しかし、より効果的、(世界エイズ・結核・マラリア対策基金戦略投資効果局長、前ユニセフソマリア支援センター保健・栄養・水衛生事業部長・國井修||大田原市出身)

多くの人々救うために

(終わり)